

# この世界で生きるあなたへ

～国境なき医師団の活動をふりかえって～

河野暁子

Cさん、ご無事でいるでしょうか。イエメンのニュースを聞くたびに、あなたがどうしているのか心配になります。難民キャンプにいるのでしょうか。それともイエメンのどこかにいるのでしょうか。あるいは戦火を逃れて、イエメンを離れたのでしょうか。でも、あなたは成人するかしないかの年齢なので、どこにいても苦勞されているのではないかと考えています。10年以上前、孤児となった男の子が、誰も知り合いのいない国で生きていくことは、どれほど過酷なことだったでしょう。あなたの過ごしてきた年月を思うと、胸が痛みます。

Cさん、あなたの母国ソマリアは、長い間無政府状態が続いていましたね。対立する集団が武装し、人々は暴力に巻き込まれていると聞いていました。内戦の続くソマリアや干ばつで仕事のないエチオピア等、アフリカ大陸から少しでも良い環境を求める人々が、密航船に乗りアデン湾を越えてイエメンに逃げてきていました。当時のイエメンは、今のような内戦状態ではありませんでした。世界の最貧国にあたるイエメンは、国自体にまったく余裕のない中、アフリカからの難民を大勢受け入れていました。

私が派遣されたのは、イエメン南部の大都市アデンから東へ約100 kmにあるアフワという小さな漁村でした。といっても、実は私はアフワがどんな所なのかよくわかりません。イエメンでは、女性は黒い装束で両目以外の身体をすべて隠し、一人で外を歩くことはあまりありません。特にアフワのような田舎では、外国人の女性はとても目立ちます。治安の状況を考えると、私の行動範囲はかなり限られ、高い塀に囲まれた国境なき医師団の事務所兼住まいの中にいるか、活動のために難民登録センターへ行くかのどちらかしかありませんでした。約1ヶ月間事務所から出なかったこともあります。今でも思い出すのは、砂漠の気候のため、昼間はとにかく暑いこと。夜になると少し冷え、満天の星空が見えること。蚊がとても多いこと。そして、夜明けとともに、ロバの鳴き声が聞こえることです。

アフワでの私たちの活動は、アフリカから密航船に乗って逃げてきた人たちの心身のケアで、他の支援団体と連携しながら行われていました。まず、密航船がイエメンへ到着した後、海岸に座り込ん

でいる人や自力で歩きだしている人を発見しなければなりません。でも、200 kmにわたる海岸の活動範囲の中で、どこに密航船が到着するのかはまったくわかりません。そのため、地元の方々から情報をもらうようにしていました。密航ですので、船が港に到着するわけでもなく、地元の方は、イエメン人じゃない人たちがいるのを見て、どうやら密航船が来たらしいと推測し、私たちへ連絡をくれていました。私たちのチームにはソマリア人もエチオピア人もいて、当然ソマリア語とエチオピア語を使えます。イエメンへ到着した人たちへ、彼らの母国語で話しかけることがとても重要でした。「ここはイエメンです。あなたは安全な場所にいます。これから国連の運営する難民登録センターへ行き、そこで休むことができます。私たち国境なき医師団は、みなさんに心身のケアを提供します」と。

難民登録センターは、砂漠の真ん中に建てられた簡易収容施設です。密航船に乗ってきた人たちは、ここへたどり着くまでにかなりの暴力を受けてきて疲れ切っています。中には怪我をしている人や感染症にかかっている人もいます。ここで着替えや食料が提供され、シャワーを浴び、横になって眠り、心身のケアを受けることは、たとえそれがわずかな時間であっても、次の場所へ進む前の充電となります。Cさん、私は孤児になったあなたと、この難民登録センターで出会いました。



イエメンの海岸



難民登録センター内の  
国境なき医師団のクリニック

密航船での航海は想像を絶する暴力だと聞いていました。小さな漁船に100人を超える人がぎゅうぎゅうに押し込められ、船底に入れられた人の中には窒息して死んでしまう人もいました。人々は膝を抱えたままの姿勢で、およそ3日間の航海を耐えないといけません。食料もトイレもありません。エンジンが故障すれば、海の上を何日も漂流することになります。密航業者はとても残忍です。銃で撃たれる、海へ投げ捨てられるなどの殺人に至ることもありました。数々の暴力が横行するところでは、当然ながら性暴力も発生しました。密航を選んだ人たちは、これほどの暴力をふるわれることを予期してはいなかったでしょうし、ともかく無事にイエメンに着くことだけを願って、小さな船の上で恐怖を耐え抜こうとしていたでしょう。そうして、イエメンらしき海岸が見えた時、密航業者から海へ飛び込むように追い立てられます。大勢の人たちが一斉に立ち上がることで、小舟がバランスを崩し転覆してしまうこともあります。その時は、大勢の遺体が海岸へ打ち上げられました。Cさん、あなたは無事にイエメンの海岸へ到着することができましたが、一緒に密航船に乗ったお母さんは亡くなってしまいましたね。こうして、あなたは見知らぬ土地で独りになったのでした。

難民登録センターでのあなたは、よく食べ、よく眠り、食事を提供する NGO で働くソマリア人スタッフと仲良くサッカーをしていましたね。私たちもたくさん話しました。あなたは、笑いながらソマリアの絵を描いたりもしていましたね。武装勢力が乗る車の絵でした。C さん、あなたがあまりに楽しそうに難民登録センターで過ごしていたので、自身が置かれた状況を理解しているのか、私はソマリア人のチームメイトと話しました。彼はこう答えてくれました。「もちろん母親が死んだことはわかっているさ。ソマリアでは、親が目の前で殺されることは珍しくないからね。C みたいな子はいっぱいいるよ」。

その後、私はあなたが次の場所で安全に過ごせるように、国連や他の NGO と連絡を取り合いました。アデンからさらに離れた所に、難民キャンプがあります。あなたはそこへ行き、支援を受けながら生きていくことになりました。あなたのような孤児に対しては、国連が責任を持って受け入れると約束してくれました。その難民キャンプでは、私のチームメイトも暮らしていて、あなたを見守ることができるとのこと、ひとまず、私はホッとしました。C さん、難民登録センターで、あなたは誰とでも仲良くなっていましたね。そんなふうに、周囲の人たちとつながりながら生きていってほしいと願いつつ、あなたと別れました。

イエメンでの私の活動をふり返ると、圧倒的な暴力の前では、できることなど微々たるものでした。それでも、私が外国人で女性であることはよかったように思うのです。ソマリアから密航船に乗って逃げてきた人たちは、私を見かけることで、安全な場所にいると感じられたのではないのでしょうか。でも C さん、あなたたちにとって、それが最善なことではないですよ。一時的にせよ、安全が確保されることはとても大事なのですが、ソマリア国内での内戦が終わらなければ、見知らぬ国で難民として暮らしていくことになり、とても多くの不便を強いられます。それを選択せざるほえないほど、ソマリアの状況が酷かったのですね。

イエメンは 2015 年から内戦状態となり、現在では世界最悪の人道危機とまでいわれる状態になっています。私が派遣されていたアフワのプログラムも、とうの昔に閉じました。私のチームメイトの中には、国外へ出た人たちもいます。国外へ出られない人たちはどうしているのでしょうか。C さん、あなたはどこでどう生きているのでしょうか。無事を祈ることしかできないのが、とてももどかしく悔しいです。

\*個人が特定されないよう、C さんについては省略、改変してあります。